

この度、第27回県学会広報局では3月開催の学会に向けて、皆様と一緒に学会を作り上げ、盛り上げていけるよう様々な取り組みをしております。


その一環として、昨年度学会において演題賞を受賞された先生方や諸先輩方にインタビューをさせて頂いております。

今回は、県士会副会長であります薄先生よりお話を伺うことができました。



千葉県理学療法士会  
副会長  
薄 直宏 先生




インタビュアー 

薄先生、この度はインタビューをお引き受け頂きありがとうございます。

先生は県士会は勿論のこと、日本理学療法教育学会では理事を務めるなど全国的にもご活躍されております。また、臨床現場では管理者として後進育成や研究活動にも力を入れておられます。

今回は組織における管理者として、臨床現場における「研究」の位置づけをお教えてください。

 薄先生


忙しい臨床の中で、漠然と「研究」を考えると難しいかと思えます。ただ、日々の臨床での患者さん、リハ関連職種、医師や看護師、多職種からの「困り」「質問」「疑問」「意見」などが「問い」となり「研究」につながるのではないかと思います。また研究の成果は、現場の質向上や医療安全、患者満足につながるのではないかと考えます。

インタビュアー 

本学会で初めて発表される方も多くいらっしゃるのではないかと思います。

学会では様々な学びが得られますが、発表したからこそ得られる学びもあると思います。


先生が過去の発表やこれまでの研究を通して、現在に活かされていることなどがございましたらお教えてください。

 薄先生

研究を行うことで、自分自身の考えや実践を振り返ることが出来てきたかなと思います。また振り


返りによって「体験」ではなく、自分の「経験」として意味づけることが出来ているのではないかと思います。

これらの「経験」が自分の所属している部門や組織全体の変化に少しでもつながればと考えています。

インタビュアー 


今年度学会のテーマは『理学療法の“シン”を問う』です。

先生がお考えになる“シン”、またその“シン”を選択された理由をお教えてください。

 薄先生

「深」です。理学療法（士）の仕事は、本当に深いと思います。またその「深」が独りよがりではなく、エビデンスに裏打ちされた「深」でありたいとも思います。

またこの文章を打っているときにニーチェの「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ」という言葉を思い出しました。理学療法の先には、何があるのでしょうか？私たちは、どの様に見られているのでしょうか？

インタビュアー 

最後の質問となります。

本学会に参加される全ての県士会員へ一言お願い致します。

 薄先生



今回の学会も WEB になります。またオンデマンドもあることで講演や発表を余すこと無く堪能できますね。

学会に参加して、自身の臨床を振り返る時間になると良いですね。

薄先生、丁寧なご回答を頂き誠にありがとうございました。

今年度も多くの先生方にご発表・ご参加頂けるよう学会準備委員一同、鋭意準備を進めております。

皆さまの学会参加、演題発表を心よりお待ちしております♪

 学会ホームページはこちら 

<https://procomu.jp/chibapt27/>